

鍵盤に魔法を



調律師 鈴木均が語る

今回から、11月に開かれた第12回浜松国際ピアノコンクールについての特別編です。3次予選、本選を鈴木均さんに現地で観戦してもらい、同行した記者が話を聞きました。

◇
— 出場者87人から残った12人による3次予選、さらに6人に絞られたファイナリストによる本選の計4日間を聴きました。長時間の熱演で、審査結果がほぼ鈴木さんの見解通りになって驚いています。

順位は的中しました。日本人が何人出るかも出場者の経歴もあえて調べず、本当に「白紙」の状態で臨みました。大勢の未知のピアノの演奏を聴くのは、産地も収穫年も伏せられたままワインを判断するソム

優勝し賞状を贈られる鈴木愛美さん(右)。このコンクールで日本人の優勝は初=11月24日、浜松市中央区で



本選用 大曲ぞろいに驚き

浜松コンクール観戦記 ①

リエのような気分でした。
— チケットも完売で客席もすごい集中力でした。

ピアノ音楽に関心を寄せる人が多いことに少しほっとしました。そしてメーカーそれぞれのピアノが心地よく聞こえたのは、楽器だけでなく担当した調律師のレベルの高さも大きい気がします。同じ楽器でも、レベルの低い管理と調律師の仕事ではあのように聞こえないかも。客席で客観的に聞いて、調律師の力を再認識しました。

驚いたのは出場予定だった全94人中、オーケストラと共演する本選用に10人が大曲のブラームスの協奏曲を準備してきたことです。1番が9人と2番が1人。ラフマニノフの3番も10人。いくつかある難曲の中の双璧です。世界中から参加する人の中でも「俺は違うぞ、みんなが選ばない曲を」と思っていたら、みんなが選んできたっていう…。

これはすごいことです。それだけ教育、演奏技術が進歩して、時代が変わってきたのだと思います。多分、ブラームスの協奏曲を彼らの年齢で用意しても、演奏会で弾く機会なんて10年後、20年後に1度あるかないかですよ。オーケストラ側から「そんな大曲、プログラムとして組むのが難しい、当分無理」って言われてしまつてしまうから。

(聞き手・南拡大朗)